

浦賀文化

令和3年(2021年)4月1日

第65号

Email:uragabunka@yahoo.co.jp

中島三郎助生誕二百年!

なかじま さぶろうすけ

文政四年(一八二一年)一月二五日、浦賀奉行所与力・中島清司の子として生まれる。幕末の始まりであるペリー来航の際に折衝にあたり、幕末の終わりである函館戦争に深くかかわった人物として知られる。



中島三郎助 (高橋由一画)

今年には浦賀奉行所の与力として活躍した中島三郎助の生誕二百年を迎えました。一月には、武士としての誇りを最後まで貫いた三郎助の生きざまを研究し、顕彰する「中島三郎助と遊ぶ会(会長大内透氏)」の主催により、愛宕山にある招魂碑の前で記念祭が行われました。

愛宕山公園は、明治二十四年(一八九一年)、中島三郎助の二十三回忌に招魂碑の建立とともに整備されたものです。

今回は、「中島三郎助招魂碑」についてご紹介するとともに、石碑の制作に関わった主な人物について見て行きましょう。

【碑文の要旨】

榎本武揚を中心とする旧幕府軍の一行は、決死の覚悟で北海道に新しい政権の樹立を目指

して江戸を脱出し、函館に政権を構えた。中島三郎助は函館奉行並という役職にいて二人の息子と千代ヶ岡に陣を構えて、薩長を主体とする新政府軍との戦いに挑んだ。しかし、二人の息子とともに討死した。中島は浦賀奉行所の与力という立場で、幕末に浦賀沖に現われた黒船との交渉に力を発揮した。造船の技術により日本で最初の洋式軍艦の製造に力を尽くした。長崎の海軍伝習所ではオランダ人から航海や造船の技術を学び、軍艦操練所で教授となった。浦賀にいた時には土地の人々に喜ばれる仕事をした。中島に対する浦賀の人々の敬慕の念は尽きない。こうした思いから石碑を建てたのである。

【碑の制作に関わった主な人物】

田邊 太一 (一八三一〜一九一五)

外交官。招魂碑の本文を執筆した人物。一八六七年のパリ万博に幕府の一員として渋沢栄一らとともに派遣されました。明治三十年(一八九七年)、中島逐波によつて著わされた浄瑠璃本『東武士写真美譽』の巻頭言を執筆しています。その巻頭言に、

「中島氏(三郎助)とは生前親しくあい交わり、近ごろ浦賀士民がその招魂碑を建設せる折からも、ただ死友にそむかざらんと心の心より」と綴っています。

この書物は、三郎助の浦賀での日常生活や函館での最期までを写真家・下岡蓮杖との交友を絡めた浄瑠璃本として書かれています。

榎本 武揚 (一八三六〜一九〇八)

幕臣、政治家。招魂碑の篆額(上部の篆書の題字)を書く。

三郎助とともに長崎海軍伝習所で学ぶ。明治二年、三郎助の盟友として函館に渡り、新しい政権を築こうと五稜郭に立てこもりました。しかし、新政府軍との戦いに敗れ五稜郭は陥落し、降伏して入獄しました。その後、明治五年(一八七二年)に罪を許され、開拓使として北海道の開拓やロシアとの間に千島樺太交換条約の締結に尽力するほか、海軍卿や文相、外相など数多くの要職を歴任しました。

臼井儀兵衛 (一八四八〜一九〇四)

浦賀湊の繁栄を支えた大商人、銀行家。大黒屋。碑の材料である石材は、仙台の塩釜神社から船で運搬されてきました。

米穀・食塩・肥料などを代々商った廻船問屋でした。幕府の米穀買入れ御用達や、米穀の

運搬をしていました。浦賀湊が繁栄したときの主役を務めた一人でした。

成瀬温 (賜硯堂)

(一八二七〜一九〇二)

書家(成瀬大域)。招魂碑本文の筆耕者。遠江(静岡県)出身。四十二歳で上京し、安井息軒の門に入りました。山岡鉄舟の師。宮内庁に奉職していた明治十二年(一八七九年)、『王羲之の聖教序』を臨書するとともに、諸葛孔明の出師表を楷書と草書に書き、明治天皇に献上します。このとき天皇より、楠木正成愛用と伝わる古い硯を賜わり「賜硯堂」と称しました。文部省検定の習字帳の編纂に数十年関わりました。

(芳賀久雄)



招魂碑

★参考資料

- ・東武士写真美譽 中島逐波
- ・中島三郎助と浦賀 横須賀開国史研究会 横須賀市
- ・続・横須賀開国史研究会 横須賀市
- ・横須賀市生涯学習財団
- ・岩波日本史事典 岩波書店
- ・ウイキペディア

歴史 語らい座 浦賀奉行所編 その十五



郷土史家 山本 詔一



●嘉永四年の浦賀●

嘉永三年（一八五〇年）は、西日本を中心に自然災害にみまわれて、米の出来が悪く飢饉に近い状況であった。その影響で米価が上がり、浦賀奉行所でも米の積み出しには神経をとがらせており、商人たちが心得違いの行動をしないようにと、きつく申し渡されていた。そんな折、伊豆・相模・安房・上総の沿岸の漁師たちは食べるご飯にも事欠く事態になっていた。

その話を聞いた浦賀の商人らは、（この四力国は浦賀の商圏でもあったので）救いの手を差し伸べようと奉行所に願いだした。嘉永四年二月、東西浦賀の商人からのこの願いは、相手方の村役人から証文をとること条件に許しが出され、すぐさま、一店舗あたり百俵を上限に、四力国に米が運ばれていった。

天保の改革による株仲間や問屋組合の解散は流通のあり方を大きく変えたが、当初の目的であった物価高騰の抑制には必ずしも機能しなかった。そのため、嘉永四年に至り、幕府は株仲間や問屋組合の再興を命令した。「株仲間解散令」により解散させられていた江戸の問屋仲間などは、続々と改革以前の状態に戻り始めていた。浦賀奉行所でも、船改めを行う東西浦賀と下田の廻船問屋仲間は、（解

散中は、個々の「船問屋」として同じ業務にはついていたが、「廻船問屋」として復活した。また、湯屋や髪結床も遅れを取らぬように願いで、冥加として「非常時に奉行の馬先で高張提灯を掲げ持つこと」「道具類を持ち出す御用」などの駆付け人足を再び受けることとなった。因みにこの時、湯屋は東浦賀に四軒・西に五軒あり、髪結床は東に一軒・西に二軒であった。湯屋に比べて、髪結床の件数が少ないのは、店を持たずお得意先へ出向く「町場廻り」という髪結いが多いからであろう。この年に株仲間として復帰できなかったのは、東浦賀の干鰯問屋であった。干鰯問屋再興に関しては、浦賀奉行の一存で許可を下せるものではなく、江戸町奉行が中心になって行っていた。浦賀奉行の戸田氏栄と浅野長祚は、「東の干鰯問屋の再興」と「新たに始めた西浦賀の干鰯問屋の取り扱い」について江戸町奉行に問い合わせている。

とを「よし」としない空気があった。さらに江戸の干鰯問屋では、またしても「十分一令」を持ち出したことに大きな反発があり、十分一令を通すなら、浦賀問屋が房総三か国からの干鰯売買をやめるべきという強い意見も出てきた。干鰯問屋の再興が遅れたのは、江戸の干鰯問屋との調整が取れなかったことも一因であった。

干鰯問屋の再興を簡単に考えていた奉行所内では、浦賀の中だけでも意見を一本化させようと与力・香山栄左衛門を中心にまとめにかかった。ところが、西問屋の息が掛かっている香山に対する不信感がわき上がり、奉行所の意見に東浦賀は「待った」をかける事態となった。

※冥加（みょうが）：江戸時代の営業税・営業免許税にあたり、商工業者などに課せられていたもの。地域により課税方法が異なっていた。

俳句の散歩道

勾玉を胸に東西恵方道

藤澤 無可有

空と海安房もつながりて冬の虹

鈴木 ひろ

笑話一題

「明治は遠くりにけり」この言葉が流行ったのは昭和四〇年代。その頃ちょうど明治が百年前だそうで、今はそれから半世紀が過ぎました。ちよつと前までは近所に明治生まれのおじちゃん、おばちゃんは沢山いて『年号を跨いで生きているなんて!』と、両親も昭和生まれ昭和育ちの私には不思議な感覚がありました。それが、今では『昭和・平成・令和を跨いで生きている』になったわけです。なんだかとても長生きしている感じがします。

最近街歩きをしていると、僅かに残っていた、明治や大正、昭和の遺産はだんだんと消えてなくなっています。例えば、詣でる人がいなくなったお稲荷さんや水神様、古い建物に昭和のアーケード。そんな町の片隅にいたはずの痕跡が、ひっそりいつか遠くになり、町の記憶と一緒にすつと駐車場になる…。



そのわずかに残された記憶がパズルの欠片のようになつて、分館には残されています。遙か遠くなつてしまったパズルの欠片を再度発掘するのは本当に大変です。何せ語り継ぐ人もいませんから、なんとか残つてくれた欠片たちはひっそりと分館の片隅で時を過ごし、いつの間にか『なぜ分館にあるのだろう?』と訝しげられる存在になります。しかし、たまにそれを遠くから探し求めてくる方がいるので、その時を分館で待っているようにも思えます。それが古い写真にちよつと写っている遠い昭和の自分だったりする時も。そんなことを思いながら通り過ぎる、分館最寄りのバス停は「ドック前」。それに「紺屋町」に「浦賀警察署前」。さて、この意味をいつまで分館は語れるかしら。

(たろうざえもん)

